

書評 『八森遺跡 先史編・先史図録編』

渋谷 孝 雄

1 報告書の体裁・内容

本書は1977年から2002年まで足かけ26年にわたって継続調査された八森遺跡の発掘調査の正式報告書であり、2003年3月に山形県八幡町教育委員会から刊行された。

布クロス装丁で巻頭カラー12ページ、本文116ページの『先史編』と鮮明な写真と実測図が対応した114ページのプレートからなる先史遺物属性観察表を含む『先史図録編』の2冊で構成された見事な本である。長年調査を担当してこられた佐藤禎宏氏と石器の各論を担当した大川貴弘氏によって執筆されている。

「八森遺跡の位置」と題された第一章では遺跡の位置、地形、段丘区分、出羽山地と庄内平野の成り立ちなど多岐にわたる視点で遺跡及びその周辺が論じられている。「八森周辺の遺跡」では最上川以北の飽海郡の旧石器及び縄文時代の遺跡についてその研究史を含めて詳述され、旧石器時代の主要な石器も図入りで紹介されている。

第二章「調査の概要」では各次調査の実施状況が表と図にまとめられ、出土遺物も石器の実測図が入った分布図と一覧表にまとめられ見やすい構成となっている。中位段丘の遺物の分布は極めて散漫でそれぞれが単独出土と言ってよいように思える。一方、低位段丘では石器の集中域が認められている。直径6.5mのAブロック、8mのBブロック、5.5mのCブロックの3ヶ所が認識され、各ブロックから槍先形尖頭器と削器が出土している。縄文時代の遺構として中位段丘で土坑1基、Tピット3基、低位段丘で地床炉2基、土坑5基が検出され、低位段丘の土坑2基から後期初頭のそして地床炉から中期初頭の完形及び器形の分かる土器が出土しているものの、遺構・遺物ともその分布は希薄であると言ってよい。

第三章「出土遺物」は、一 出土石器、二 出土土器として出土した石器と土器が詳述されている。石器は1 槍先形尖頭器から15接合資料まで縄文時代早期以降の定型的な石器である石鏃や石錐、石匕、石鏝も含めて、分類のうえ、説明されている。縄文時代早期以降の石器を

除き、原則として出土地点も合わせて図示されており、分かりやすい記述となっている。また、冒頭でも述べたが図録編では左側に実測図が、そして右側にそれと対応する鮮明な写真が載せられており、読者にとって極めて親切なものとなっている。報告書を読まれた神奈川県諏訪間順氏から早速、P L 78の215の調整剥片と報告された実測図は国府型ナイフ形石器ではないかとのメッセージが筆者に寄せられた。この石器は1995年の中位段丘の調査で1層から出土した珪質頁岩製の石器であり、実見させて頂いたところ、間違いのない見事な国府型ナイフ形石器であることが判明した。諏訪間氏の慧眼に、おそらく、この照合に便利な構成の手助けもあったのだろうと思われる。関係資料はなく、単独出土であったが、これまで、朝日村越中山遺跡K地点が国府型ナイフ形石器の北限とされてきた。この石器の出土により庄内平野の北部まで分布域を拡大することが確認されたことになる。また、斧形石器の接合資料が3例検出され、石斧の製作地であったことが判明したことも特筆できる成果といえるだろう。

出土した縄文土器は第一群から五群までに大別された。第一群土器は早期末の縄文条痕及び表裏縄文土器である。第二群土器は前期前半に、第三群は新保・新崎式に併行する北陸系の土器と円筒上層a式に近い中期初頭の土器である。後期の土器を第四群土器としているが、これには中期末のものも一部含まれ、後期初頭の土器には土坑から出土した完形土器や図上復元のできる土器がある。さらに、断片的ながら後期中葉の土器片も散見される。第五群土器は晩期大洞B C式の土器である。八森の中位段丘と低位段丘には連続はしないものの早期、前期、中期、後期、晩期の縄文時代各時期の足跡が確認されたことになる。

第四章「八森遺跡の石器群」は考察編であり、一 石器群の類別、二 桑園地区の旧石器群、三 神子柴文化の研究抄史 四 八森石器群の評価で構成されている。佐藤氏はこれまでの研究史を踏まえ、八森遺跡の石器群

を「神子柴型石器群であり、神子柴文化の一つの典型を示す様相と理解」しながらも、その時期は「東山型ナイフ形石器文化の盛行期に桑園に到来した槍先形尖頭器・斧形石器・削器を作出する集団が、石刃石器文化と接触があつてその石器を取り入れたとするのが自然な理解であるとし、桑園の石器群は後期旧石器時代の可能性が極めて高いことになる」と評価している。

以上、報告書の紹介をおこなったが、種々の制約がある中、二年間で「古代編」と「先史編」の二冊の見事な報告書を上梓されたことに改めて敬意を表したい。

2 八森石器群の評価について

さて、以下で佐藤氏が示した桑園地区のナイフ形石器と神子柴型石器群についての見解が妥当なのかどうか、すなわち、ナイフ形石器と神子柴型石器群は共存するかどうかを報告書の記載から検討してみたい。八森遺跡の中位段丘と桑園地区からは合わせて1,208点の石器が出土した。156点が中位段丘で、1,052点が桑園地区からの出土である。これらの石器は、どのくらいの年代幅を持つのだろうか。大きく分ければ縄文時代早期以降のものとそれより古いものの二者があるということが出来る。層位的には1・2層から縄文時代早期以降の石器が、2～4層からそれより古い石器が出土している。2層では両者が混在している。縄文土器は早期、前期、中期、後期、晩期とそれぞれの時期のものが出土している。石筥や石匙に早期や前期に特有のものがみられるが、縄文時代早期以降の石器もこれらの各時期にわたるものが混在している可能性が高い。

さて、早期より古い石器も年代幅を持つのだろうか。まずは、ほとんどが単独出土となる中位段丘には2点のナイフ形石器がある。ひとつは6次調査で出土した長さ3.9、基部二側縁に加工のあるナイフ形石器(334)で、もう一つは前述した国府型ナイフ形石器(215)である。両者とも東北日本では珍しいが、それぞれ違う時期のものだろう。

桑園地区で問題になるのは石刃素材で基部に加工されるナイフ形石器と玉髓製の搔器の一群と尖頭器、斧形石器に代表される一群が同じ時期のものかどうかということである。

桑園地区の斧形石器と尖頭器の組み合わせには石刃を

素材とした搔器や彫刻刀形石器が伴うことはむしろ自然であると思われる。しかし、この石器群に石刃素材のナイフ形石器が伴うのだろうか。

山形県域で最初に確認された東山型ナイフ形石器には玉髓製の搔器が共伴することが小国東山や新庄東山を調査研究された加藤 稔氏によって早くから指摘されていた。この東山型ナイフ形石器は、もう一つの石刃ナイフで分布域が重なる杉久保型ナイフ形石器との時間的な前後関係を捉えるということが当初からの研究課題であり、この点については佐藤氏も報告書の中で触れている。加藤氏は1965年には杉久保→東山(加藤1965)、1969年には東山→杉久保との見解を示し(加藤1969)、1970年代後半には再び杉久保→東山との変遷観を示した(加藤1978)。再び東山を新しくした背景には、見え隠れする尖頭器の存在と、古い細石刃文化に東山型ナイフ形石器に類似するものが伴うこともその一因であったと思われる。

1990年代に入ってからの新潟県下の調査で杉久保型ナイフ形石器を含む調査例が増え、これらが広域火山灰ATの上位に存在することが確定する(澤田1996年他)とともに、岩手県大渡 遺跡の調査ではATの下位と上位に東山型の大形の石刃ナイフが存在する事実が明らかにされた(中川編1995年)。さらに新潟県三面の樽口遺跡の調査でも東山型ナイフ形石器を持つ石器群がATの下位と上位から出土し、これらはATより上位の杉久保型ナイフ形石器を持つ石器群より古いとの見解が示された(立木編1996年)。現在では東山→杉久保の変遷が決定したかのように考えるむきが多い。

筆者は、上記2遺跡のAT下位からの出土を疑うものではないが、大渡 や樽口ではAT上位からも出土すること、山形県お仲間林遺跡では分析の結果ATの上位で出土していること(阿部・五十嵐編1991年)、新庄市上ミ野A遺跡でも確実にATの上であること(柳田・須藤・阿子島2000年)を考えれば、東山型ナイフ形石器をもつ石器群は息の長い石器群であり、すべてが杉久保型ナイフ形石器をもつ石器群より古く位置づけられるとの結論を今の段階で出すことはできないのではないかと考えている。新庄市乱馬堂遺跡の東山型ナイフ形石器と共伴する「裏面搔器」に関して、山中一郎氏は旧石器的な製作技術であるのかどうか、年代決定が難しいと考えている

(山中2003)。

さて、このような考えを前提として八森遺跡桑園地区の石器を見るとどういう理解ができるのだろうか。ひとつは佐藤氏が述べるようにすべて同じ時期のものとの考えであり、もう一つは桑園地区の石器群は時期の異なる少なくとも二つの文化が混在しているという見方である。このように考えてみた場合には出土している石器を二つのグループに分けることが可能かどうかの吟味が必要となる。

まず、石器の出土位置を見てみよう。報告書の図21、25から尖頭器と削器A、B、Cの各ブロックとその周辺からの出土が多く分布域がほぼ重なっていることが分かる。また、図22は斧形石器の分布域もほぼ重なることを示している。一方、図23はナイフ形石器は全体的に出土位置が散漫でA、B、Cのブロック内には1点もなく尖頭器と削器を主体とする石器群とは重ならないことを示している。搔器は尖頭器、削器の分布域と重なるものと重ならないものが半々というところか。2点の彫器も1点は尖頭器、削器の分布域と重なるが、もう1点は離れている。図24は石刃も搔器と同様な分布状況であることを示している。

このことから、尖頭器と削器、斧形石器は強い結びつきがあり、ナイフ形石器は独立し、搔器と石刃は両者と関係があるといえるのではないだろうか。石器の分布状況からは、尖頭器、削器、斧形石器の中にナイフ形石器

は入らない可能性があるとしても許されるのではないだろうか。

つぎに石材利用はどうだろうか。尖頭器の石材は珪質頁岩を主体としているがこれに玉髄が加わる。削器や搔器には黒色頁岩が加わるが、全体の傾向は尖頭器と類似する。ナイフ形石器や石刃もこれらと際だった差を認めることはできない。斧形石器はその機能故と考えられるが軟らかい石材である砂岩と泥岩が加わる。石材利用からは石器群を二つに分けることはできないようである。これまでの日本列島内の調査で尖頭器、斧形石器、石刃素材の搔器、彫刻刀形石器、削器の組み合わせを持つ石器群に石刃製のナイフ形石器と共伴した例は知られていない。東山型ナイフ形石器の下限を捉えきってはいないとはいえ、長者久保・神子柴石器群と共伴する類例がない段階で、積極的にその共伴関係を認めることには躊躇せざるを得ない。八森遺跡桑園地区の縄文時代早期より古い石器群がすべて同時期の所産とする決定的な証拠はまだ不足しており、現段階では時期の異なる少なくとも二つの石器群が存在していると考えるのが自然なのではなかろうか。

土器の出現を縄文時代の始まりとし、神子柴石器群から縄文時代とする現在の主流的な考え方については、佐藤氏と同様違和感もある。この問題については、筆者自身の整理がついていないため、後日の課題としたい。

※本稿は平成16年2月29日に八幡町で開催された「八森遺跡発掘調査報告書刊行祝賀会」の席上で述べた書評に
1 報告書の体裁・内容を加筆したものである。

参考文献

- 加藤 稔 (1965)「東北地方のナイフ形石器型石器文化」『歴史教育』第 3 号 pp22～27
 加藤 稔 (1969)「東北地方の旧石器文化(前編)」『山形県立中央高等学校研究紀要』第 1 号 pp38～45
 加藤 稔編 (1978)『弓張平遺跡第 1・2 次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 15 集
 阿部祥人・五十嵐彰編 (1991)『お仲間林遺跡 1986』慶應義塾大学民族学考古学研究室小報 8
 中川重紀編 (1995)『大渡 遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団調査報告書第 215 集
 立木宏明編 (1996)『樽口遺跡発掘調査報告書』朝日村教育委員会
 澤田 敦 (1996)『上ノ平遺跡 C 地点』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 73 集
 柳田俊雄・須藤 隆・阿子島香 (2000)「山形県新庄市上ミ野 A 遺跡の第 3 次発掘調査」『第 14 回東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』pp42～49
 山中一郎 (2003)「山形県の考古遺跡の思い出」『山形考古』第 7 巻第 3 号 pp11～13

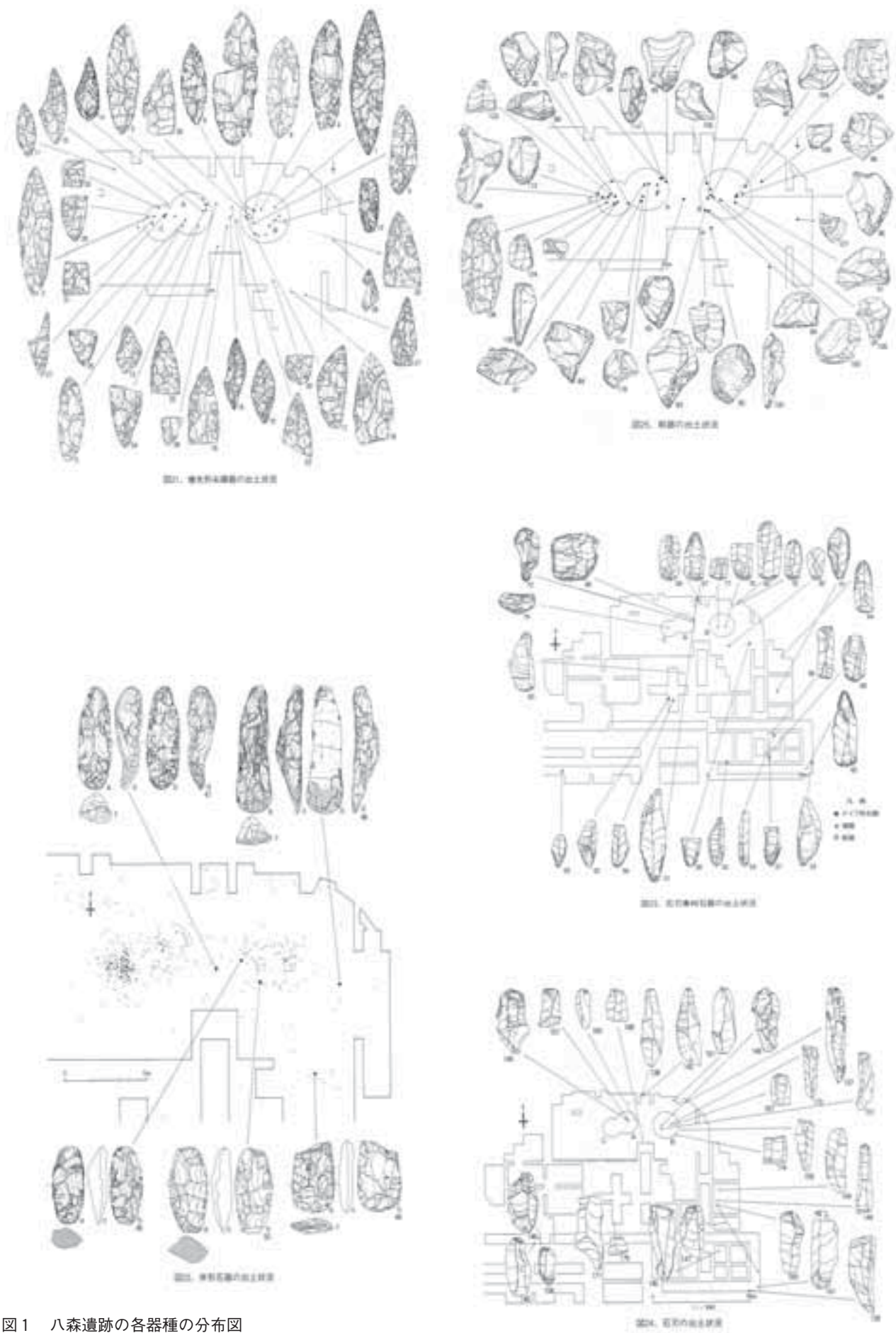


図1 八森遺跡の各器種の分布図